



福島放技ニュース

THE NEWS OF THE FUKUSHIMA ASSOCIATION OF RADIOLOGICAL TECHNOLOGISTS

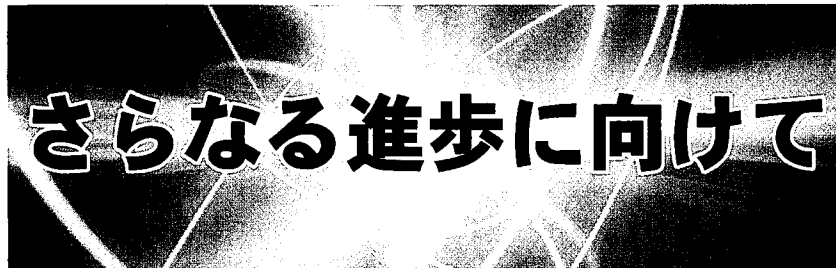
2006

12月20日号

100
VOL.

発行所 社団法人 福島県放射線技師会

〒960-8003 福島市森合字蒲原16-7 TEL/FAX 024(559)1043

ホームページアドレス <http://fart.jp/>

副会長 齋藤 康雄

福放技ニュースが今回発行で100号になった。記念すべき特集号に巻頭言を書きながら、編集を担当していた当時のことを思いだした。もう23年も前のことである。その頃は、一般会員の情報源と言えば、年に1回発行される会報と半年後を目途に発行されていた技師会ニュースくらいなものだった。第1号は技師会ニュースとして昭和54年8月に発行されている。昭和58年に、山村稔氏が会長に就任されたとき、庶務的なお手伝いをした。初めの頃は、活字を一つ一つ拾ってタイピングする印字機も使っていた。その後ワープロに変わったが、当時は液晶の画面が小さく全体の構成や段組が難しく、苦肉の策として部分的に文章を印刷し台紙に切り貼りをしていた。見出しは拡大コピーでアクセントを付けた。B4版1枚程度であったが、それなりに記事集めには苦労した。それを振り返るとき、改めて企画編集を担当されている委員のご苦労に頭が下がる思いである。

ニュースは会報を補間するものとして、会員の方々に早く伝えなくてはならない諸々のお知らせや出来事などをタイムリーに届けるとともに、その都度の会の姿勢や方向性なども同時にお伝えし、福島県放射線技師会としての目標を達成するために、意思の統一を図るべく、機関紙としての役割も果たしてきた。インターネットや、映像を伴うリアルな情報源がふんだんにある現在でも、1人1人の手元に届く紙面による情報は目に付きやすいし、現状では会運営に取って不可欠のものであると考える。

しかし、いくら情報を発信しても、興味を示し見て貰えなければ無駄な努力になりかねない。是非を語る前に拒否反応を示されたのでは前には進まない。以前は会としての仲間意識と団結力が強かったような気がする。会員の力を結集しなければ守られない職業環境があったからなのかも知れないが、それだけに会の動きにも関心が高く、ものを申す会員も多かった。

職能団体としての技師会は、会員の声を結集し反映させるような、所謂クラフトユニオンのような面もある。社会情勢が変わると必然的にそれぞれの立場も変わり、優位性が入れ替わることも希な出来事ではない。私たちは今まで築いてきた実績と技術レベルをアピールしてこそ、専門職業集団としての存在が認められ、公益法人として社会的な評価に繋がるのだと思う。

山積する問題を解決するには、より多くの会員の意思をどう取り込んでいくかに掛かっている。多くの人間が集まれば問題を抱えることになるのは当然の摂理であるが、それらの問題を解決することによって成長し、組織力も高まっていくものと確信する。

平成18年度放射線技師学術大会開催される

(社)福島県放射線技師会主催による平成18年度放射線技師学術大会が、平成18年11月12日福島県立医科大学の講堂に於いて開催された。

新里実行委員長の開会宣言、片倉大会会長の挨拶の後、一般演題の前にフレッシューズセミナーとして、「朝からズバツとわかるMRI—拡散強調画像—」の教育講演が行われた。

講師の白河厚生総合病院の川上先生には難しい理論をやさしく解説していただき、説得ある内容で好評であった。

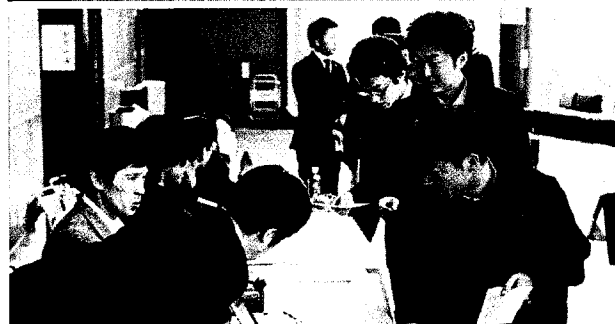
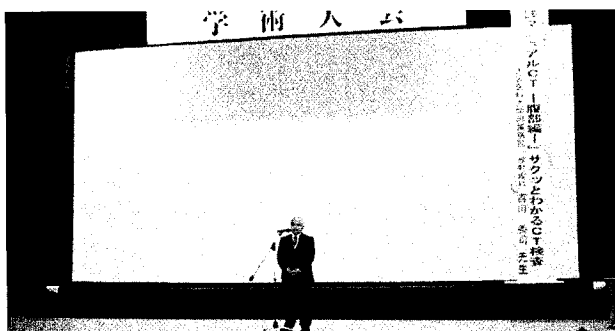
また例年行われているランチョンセミナーは、話題になっている本“「超実践マニュアルCT—腹部編—」サクツとわかるCT検査”の著者の一人でもある、大阪医科大学附属病院 放射線科の吉川秀司先生の講演であった、基礎的なところから実践まで、まさに分かりやすく明快に教えていただいた。

一般演題は24題を数え、MRIやCTの発表が多く見受けられた、精度管理委員会によるアンケート調査報告は“造影検査に係る患者さんへのインフォームドコンセント、同意書、承諾書の記載などの実施状況”の報告であった。思ったより高率で実施している施設が多かったが、施設や個人により開きが大きいので、我々放射線技師も引き続き施設内の啓蒙活動の必要性を感じた。

参加者も150名を越え、ほぼ例年並みであったが、会場が広いせいか閑散とした感は否めなかった。

次回こそは、会場を満員にするような学術大会にしたいものである。

何時ものことでありますが、県立医大の関係者の方々、県技師会の学術委員会の皆様、本当にご苦勞様でした。



マンモグラフィ技術講習会終わる

平成18年度県委託事業、福島県生活習慣病健診従事者指導講習会(マンモグラフィ)は、12月2・3日の二日間にわたり、医大附属病院で開催されました。

当初、医師部門の対応が遅れ開催が危ぶまれましたが、同時開催できるようになり、受講希望者を募ったところ70名の応募となりました。しかし、定数が50名のため、20名の方は次回優先として選考しました。

初日の2日は、開講式に続き9時から11時5分まで講義Ⅰ、講義Ⅱ、講義Ⅲを医師部門と合同で臨床講義室で受講しました。11時20分からは医師部門と分かれ、技師部門は講義Ⅳ「マンモグラフィの基礎」、講義Ⅴ「マンモグラフィの読影とカテゴリー分類」が13時50分まで行われました。

14時から読影実習とポジショニングとなり、「腫瘍」、「石灰化・その他」、「ポジショニング」を3グループに分かれ16時40分まで実習しました。

16時50分からは、品質管理の実習で5グループに分かれて、「線量線質」、「機器管理」、「画像管理」、「デジタル管理」、「現像処理」について学びました。更に18時45分から19時35分までは「臨床画像評価」を5班に分かれて行い、読影試験に備えました。



二日目の3日は、8時50分から11時30分まで前日の続きの品質管理実習が行われました。

12時30分からはよいよ試験となり、読影試験40症例を60分、筆記試験20問を50分で行われ、15時20分、閉講式となりました。

二日間、真剣に厳しく臨んだ受講者からは、日程がきつい、内容が多すぎるなどアンケート回答もありました。

試験結果は、A評価3名、B-1評価3名、B-2評価10名、C評価10名、D評価8名となりました。

受講日までに予習を十分にした方は受講に余裕があり、成績も上位に評価されているようですから、次回の講習にはテキストを十分精読して、B以上が50%を超える準備が期待されます。

平成18年度 第2回理事会議事録(抄)

日時：平成18年11月12日(日) 14:00～

場所：医大附属病院放射線部

出席者：片倉俊彦、鈴木憲二、齋藤康雄、齋藤重雄、今野英麻呂、富塚光夫、新里昌一、吉田豊、秦昭吉、白川義廣、八巻昭一、長川正良、遊佐烈、森口節男、馬場栄二、(事務局)伊藤陸郎、村上克彦

欠席(委任)者、本田規、飯野克郎、持館博志

会務報告

片倉会長より会務報告された。

1、平成18年度放射線技師総合学会大会時 会長会議の報告(齋藤副会長より報告)

- ①定款改正(案)について
- ②会員動向と会費納入状況について
- ③60周年記念事業について
- ④会費免除規定の改定について
- ⑤入退会等会員籍の登録管理に関する規定の改定について
- ⑥表彰規定に関する細則の改定について
- ⑦第23回放射線技師総合学会大会について
- ⑧レントゲン週間用ポスターについて
- ⑨都道府県技師会での除名者に対する取り扱いについて
- ⑩その他

○福島県放射線技師会が公益社団法人であり続けるには、日本放射線技師会の会費取扱が大事業費では無理で、他の事業費を増やす必要がある。

○定款改定に関しては、委任状提出になるので、県技師会での意思統一が必要ではないか。

○定款改定に関しては、会員の理解が得られるようアピールしていこう。

○第23回放射線技師総合学会大会は石川県金沢市で6月7日～6月10日に開かれる。

○獣医療法施行規則が改正に向けて動いていて、従来のX線撮影に加え、放射線同位元素を使用できるようになる見込み。

2、次年度表彰者推薦など

- ①50年永年勤続表彰に推薦する該当者はなし。
- ②30年表彰に推薦できそうな会員が10名いて、表彰を受けるか本人に確認中。
- ③診療放射線業務功労者表彰に伊藤陸郎氏を推薦する。
- ④厚生労働大臣表彰に馬場栄二氏を推薦する。
- ⑤知事表彰に前理事会での推薦者から辞退の申しであり、持館理事を推薦で準備中。
- ⑥永年勤続50年表彰を受けられた根本氏から本会へ金10万円の寄付があった。

3、講習会など

①乳房撮影精度管理講習会

12月2～3日に県立医大で行なう、定員をオーバーしたので20名ほど次回にまわってもらった、急ぐよ

うであれば、仙台で受講という方法もある。

○講習会の会場に入って、講義だけを受けることはできないかという声があった(馬場)。

○スタッフにすれば会場に入ることはできそうだ。

○医師会より、19年の8月に行なう講習会を合同で開催しようと要請がある。

②放射線管理士、機器管理士の試験

12月3日(日)に行なう。

③19年度アドバンス講習会

ホームページで確認して下さい。

4、その他

①八巻：福島放技ニュースが100号になるので特集号として編集集中である。

②事務局：11月19日～25日まで医療安全推進週間です、ポスターも届いている。

③2006年度分の会費を11月15日までに納めないという通知がきている。

以上で審議を終え16時50分散会。

(議事録作成人 森口節男)

アドバンスド放射線技師合格発表

平成18年10月1日アドバンスド放射線技師認定試験が行われましたが、その合格が日本放射線技師会のホームページ上で発表されています。受験された方は至急確認してください。

また合格された方は、各自でアドバンスド放射線技師への登録を同じホームページから申請してください。

おめでとうございます

本年度秋の叙勲で、元県南支部長 村松影治さんが、長年の功績を評価され瑞宝双光章受章の栄に輝きました、誠におめでとうございます。

会員一同、心よりお祝い申し上げます。

出版広報委員会より

福島県放射線技師会ニュースの100号記念特集は、いかがだったでしょうか。各支部が独自に1ページを担当して作りました。それぞれ内容が異なり面白いものが出来たのではと思っています。各支部の編集委員の皆様、慣れない紙面作り、本当にご苦労様でした。

福島県放射線技師会ニュースは2ヶ月に1回の発行ですので、新しい話をタイミング良く提供するのには難しいのですが、年に一度の会報では伝えられないことや身近で役に立つ話題を中心に載せて行きたいと思っております。

諸先輩が育ててくれた100回の歴史を引き継いで、今後も発行して行きますので、会員の皆様のご協力とご支援を宜しくお願い致します。



県南支部

第9回イメージカンファレンスの開催

平成18年11月7日に第9回イメージカンファレンスが郡山市、田辺製薬社屋で行われた。

今回のメインは呼吸器外科で県立医大の鈴木弘行先生に講演をして頂いた。1998年の統計で肺ガン患者は5万人だったが2010年には12万人になるだろうとの予測があり肺ガンは増加傾向にある。肺ガンの治療には化学、放射線、手術の3つの治療があるが、ラパロでの肺切除の様子をビデオで見せて貰った。また病変部分だけを切除し気管支をつなぐ機能温存手術法や事前の画像診断ではリンパ節の大きさを転移を予想する(1cm以上で60%の確率)ことや血管走行の位置確認が大切だと話があった。その他「呼吸器疾患のルーチン検査と問題点」の発表では、RFA(ラジオ波でガンを焼く)の後CTだと出血などで評価が難しいがPETだとわかりやすいことやアドバイザーのDrからGGO(すりガラス状陰影、早期ガンのことが多い)にはハイレゾCTが有効である(1mmスライスが良いが2、3mmでも可)と話があった。内容の濃い勉強会で9時30分位に閉会となった。(北島)

会津支部

第23回会津MRI研究会開催される

平成18年11月10日(金)、山鹿クリニックにおきまして、第23回会津MRI研究会が開催されました。まず、共催いただきました(株)シーメンス旭メディックの松本氏のほうから「コイルの基礎からTimまで」と題打って、MRI撮像時に使用される各種コイルがどのように信号を検出するのかと言った基礎的な話から、コイルがどのように発展していったのかという遍歴や撮像部位ごとのコイルの特徴の話、そして最新技術として全身を撮像対象としたTim(Total imaging matrix)システムの話などをしていただきました。普段、なかなかテキストなどでも目にする事の少ないハードウェア的な内容だったので、とても新鮮な感じで聞くことができたように思います。

また、いつも行っているフィルムカンファレンスは、内容を脊椎領域に限定したもので、とりわけ脂肪抑制に関する話題で非常に盛り上がりました。普段からMRIに携わっている方たちも、この領域での脂肪抑制の効き具合に苦労されているようで、どうしたらもっと効果が上がるか、こうすると多少効き目が上がるとか、こういった補助具を使用して試しているなど、施設間を越えた活発な情報交換が行えたようでした。

当日は、あいにく肌寒い雨の日でしたが、それでも多くの施設から多数の参加をいただくことができました。(森谷)

県北支部

第5回MRI技術研究会県北地区勉強会開催される

平成18年11月29日(水)福島医大カンファレンス室において、第5回MRI技術研究会県北地区勉強会が開催されました。今回は整形領域をテーマに、膝関節及び肩関節について撮影のコツやアーチファクトについて2名の技師が発表し検討を行いました。また後半には、各病院から持ちよったフィルムによるディスカッションが行われ、様々な意見交換や有意義な情報交換の場となりました。各施設ともに、日頃よりMRI撮影技術の向上や研鑽に励んでいるようでした。

【発表者】丹治 一(北福島医療センター)
樵 勝幸(福島医大病院)

『福島市マンモグラフィー検診読影会』の報告

7月12日から毎週水曜日、福島市保健福祉センターにおいて開催されていた「福島市マンモグラフィー併用検診読影会」が12月6日で、今年度は終了しました。これは昨年度に引き続き福島市医師会より依頼を受け、市内の検診施設で撮影されたフィルムを、撮影した技師及び読影会担当の技師が、画質やポジショニングなどについて検討し、マンモグラフィーの精度管理向上のために協力していくという主旨のもと行われていました。毎回10名以上の技師が参加しており皆、真剣に撮影技術の向上に取り組んでいるようでした。参加された皆様、大変にご苦勞様でした。(池田)



編集後記

『酒はチビチビ飲むものじゃない』『クッチャンナゲ・マシダ(酔い潰れるまで徹底的に飲む)』

韓国人がお酒を飲む時の決まり文句だそうだ。

杯を一気に飲み干し、相手に飲み干して返すのが礼儀だと言う。お酒の弱い自分にとっては、豪快で何ともうらやましい。

これからの年末年始、お酒を飲む機会も増えますが、飲みすぎには注意して、楽しいお酒を飲みたいものです!!

(池田)

県南支部

福島放技ニュース100号記念に寄せて

県南支部 支部長 吉田 豊

100号記年特集との事で県南支部を代表して一言ご挨拶申し上げます。

本ニュースが発刊されて約20年近くになりますがバックナンバーを探した処1988年8月発行の6号からしかファイルされていませんでした。

第6号ニュースを見ますと今とは編集方針が異なります。何となく余裕があり、のどかな時代を思い出させるのです。当時の医療制度は今ほど厳しくなく技師会の組織率や会員同士のコミュニケーションも悪くは無かった様に思います。Eメールでの通信など今は一見、便利に思えますが「ゆとり」が失われている様に感じます。これらの根底に「医療界の疲弊」が原因しているのは事実です。私達の業界でも「診療報酬の引下げ、人件費削減、装置更新の延期、患者負担増による医業不振…」更には他職種との仕事の奪い合いが起きているとも聞きます。この様に厳しい時代に突入した訳です。職能団体である「放射線技師会」の組織率の伸び悩みが取り沙汰されていますが今こそ会員が結束する時と考えます。現在の技師需要は低く、卒業しても就職困難な状況が続くと懸念されます。故に会員が互助精神を持って一歩でも前進する必要があります。特に暗礁に乗り上げている「技師法」の改正には組織率の低下は障害となります。会員の中には様々な問題を抱え、技師会の存在に疑問を持ち退会を考えている方もおられると思いますが悩まないで各支部の役員に相談される事をお勧めします。問題解決の為には役員一同、お役に立てると信じます。昨今、私達の職種に対する世論の見方が変わった事に気が付くでしょう。私が技師になった頃はなかなか「診療放射線技師」とは呼ばれず新聞・テレビさえも「レントゲン技士やX線技師」などと報じていました。何かと影響を及ぼす報道関係も最近では正式にアナウンスする様にもなりました。扱うモダリティが増えたせいかもしれません。今では立派な市民権を得た職種と自負しても良いと思います。技師になりたいが?と云う相談も増えてきましたし臨床実習中の大学生も熱心に勉強しています。本ニュースがますます会員への活力の源になる事を期待して挨拶と致します。

県南支部紹介

県南支部は、郡山市から県南部、東は田村市までの医療施設、及び放射線技師免許保有者から構成され、会員208名と県内最大の会員数となっています。

支部としての行事は、年度初旬の総会から始まり、CTビギナーズセミナーの支部活動、サマーセミナー及び納涼

ビアパーティー、郡山市健康祭りへのブース出展、福島県MRI技術研究会県南支部勉強会、新年勉強会及び新年会を主催 共催し、また会員の叙勲に際し祝賀会のお手伝い等を行っております。

平成15年より会員のニーズに合う様、行事、活動の内容や日時等を再検討し企画しておりますが、昨今各行事への出席者の減少傾向が気になるところです。より多くの会員が参加するような魅力ある行事等を今後も企画していきたいと思っておりますので、ご意見や希望等がありましたら遠慮なくお聞かせください。(熊田)

ファミリーフェスタ

平成18年10月1日(日)に、郡山市総合体育館にて、ファミリーフェスタ(保健・福祉フェスティバル郡山2006実行委員会主催)に、県技師会県南支部として出展してきました。今回も昨年同様「いまどきの健康診断」というテーマにて一般撮影・マンモ・CT・MRIなどの画像展示や検査説明、骨塩定量の無料測定、放射線検査に関する相談を行いました。来場者の中には、病院での検査時に疑問や不安を感じても「その場では聞けなかった」とおっしゃる方もいて、このような方に時間をかけて説明する事により、疑問や不安が解消され、安心して再び検査を受けて頂けるものと思われまます。また今回も、骨塩定量のお試し測定を行い大盛況でした。郡山市では今年度から骨塩定量が健診項目に入ったこともあり、お試し測定をきっかけに受診率の向上につながれば良いなと感じております。

(佐久間)

白河心血管インターベンション研究会

平成18年10月5日にホテルサンルート白河に於いて、白河心血管インターベンション研究会が開催された。講師として星総合病院 心臓病センター副院長 木島幹博先生を招いて「冠動脈疾患に対するステント療法の現状と抗血小板療法」について講演をして頂いた。動脈硬化の原因、薬剤溶出性ステントを使用し再狭窄率を下げする方法が主流になっていること、それに伴い血栓症を防ぐため長期間の抗血小板療法が必要なことなど利点、欠点を話されていた。参加人数は50人を越え椅子が足りない程の盛会でした。(北島)

編集後記

100号記念おめでとうございます。年6回の発行で100を数えるには大変なことだと思います。諸先輩方々の継続させる意志の強さを感じました。また、今回も県南支部の皆様、本当にご協力ありがとうございました。(北島)

会津支部

ニュース100号を迎えて

会津支部長 秦 昭吉

歴代の編集委員を担当された皆様は、年4回の発行に向けて原稿の依頼、時には自ら出向き取材して記事を書き並々ならぬご苦勞があったことと推測いたします。100号の発行を迎えることができましたことは県技師会の弛まぬ活動の継続の証明でもあります。今後とも大切に行きたいものです。大変ご苦勞様でした。

単純に計算すると昭和55年に第1号が発行されたこととなります。当時の会津支部会員は40名程で支部活動としては年1回の総会が開催される程度でした。前年の54年から支部対抗の県技師会ソフトボール大会が開催されるようになり、支部においても病院対抗の練習試合をして優勝を目指して練習したことを思い出します。実にのんびりとしたものでした。

今年の3月の時点で支部会員数は93名、会津若松市内には竹田総合病院と会津中央病院の2大病院があり支部活動の中心となって協力して頂いております。支部としては地理的に分散しており技師会活動への参加に距離的な面で苦勞されている会員も多く、支部の雰囲気としては、競って研究発表を行うなどの活発さはなく盛り上がり欠ける気持ちはあしませんが、支部としてのまとまりは良い方だと思います。これは会員数も少ないことも理由の1つかもしれないが、まあ要するに会津らしい所でもあるのでしょう。

包括医療をはじめ医療の再編を目指す医療行政は我々技師の雇用も厳しくなり楽観できないところですが、各人が個人の評価を高めることに視点を置いて行動する必要があります。専門性の高い技術の習得のために各種研修会への参加も必要です。アドバンスセミナーへの参加を呼びかけていますが、会津支部会員は他支部より参加者の割合が少ないようです。地理的に不利な点も要因でしょうが、今後開催される研修会へ一人でも多く参加されるように、支部としても今まで以上に働きかけが必要と感じています。

会津支部においても女性会員が大幅に増えました。これは単にマンモ検診に乳房撮影が導入され女性技師が適任だからという理由だけではなく、優秀で女性特有の勤勉さがあります。技師会活動にも積極的に参加してくれるし、各種研究会に参加する女性技師の多さに驚いております。この現象が技師会活動に敷居を高くしている会員にも波及して、各種研究会・研修会に参加者が多くなることを期待しています。

支部活動

- 1：定期総会と会員の研究発表
- 2：支部役員会 年4回
- 3：会津画像研究会
平成2年～ 年4回開催しており、63回の開催となった（平成18年11月29日現在）
- 4：会津MRI研究会
平成13年～ 年4回開催しており、23回の開催となった（平成18年11月10日現在）
- 5：会津若松市の健康まつりへの参加
- 6：会津若松市乳房合同読影会への参加
平成16年～ 市の乳癌検診のフィルム読影を月2回程度11月初旬ころまで行っている
- 7：会津支部ボーリング大会の開催
年1回程度、懇親会として行っている

「のど元過ぎれば…」

「何か会津支部の役員やってくれない？」突然の申し出に「はあ、いいですよ」なんて感じであっさり返事をしてしまい、そんなこんなで始まった会津支部編集委員ニュース担当係。どんな内容の仕事なのかよく分からないまま、気軽に引き受けましたが、いやこれが意外と大変でした。発行前月までの締め切りはあるし、原稿が遅いと催促のメールが来るし、実は原稿用ネタをどうしようかと悩んでみたり…。なんだか地方在住のフリーライターみたいな感じで、つくづく自分は物書きには向かないと感じながら、せっせと原稿を作っていました。

しかしながら、ニュース担当となったおかげ（なのかどうかは分かりませんが）、積極的にいろいろな勉強会や講習会に行くようになり、また健康まつりのイベントなど、通常の病院内業務から離れた場面に参加する機会もあり、何か自分自身の得るものがとても多かったように感じています。また、こうして県技師会記念100号に関わられた事もうれしく思います。

結構大変だった思いのニュース担当係でしたが、今となっては、もう少しやってもいいかな・なんて考えてる自分がいます。我がことながら、懲りないようです。

編集後記

各支部1ページは結構な量でした。今回のことで毎回編集に当たる人の苦勞が分かった気がします。…やっぱり自分は物書きには向かないんじゃないかと感じてしまいました。
(森谷)

県北支部

“継続は力なり”100号記念



支部長 齋藤 重夫

吾妻連峰の裾野にも初冬の季節が訪れ、飛躍の酉年が間もなく終わりを告げようとしています。

この度、県技ニュースが100号の記念号を発刊するにあたり、県北支部より心から御祝を申し上げます。県技ニュースは、編集広報担当が会員のため、最新の情報や研修会、各種認定資格セミナー、会員の状況、各支部の話題など、原稿を収集する熱意が大きい。それは、先輩役員および編集担当者が構築したもので、この道のりは決して平坦でなく紆余曲折もあったと考えますが、長年に渡って継続した結果、100号まで発刊することが出来たと思います。会員の愛読者のため、今後も継続して発刊することを期待します。県北支部でも編集広報担当が支部の行事、施設紹介、新人紹介など掲載した支部たよりを年間2～3報の発刊しておりますが、会員からの原稿提供が少なく苦勞を重ねている次第であります。今後とも、県技ニュースに負けぬように、支部たよりを継続して発刊して行きたいと思っております。

さて現在、医療を取り巻く環境は非常に厳しいものとなっております。病院や医療施設に於いても医療制度改革が進行しております。放射線部門でもコスト削減の中、どここの施設でも放射線機器の老朽化が進み、患者サービスの向上と反比例した形で生産性の効率化が図られている状況にあります。また、医療社会全体も二極化に拍車がかかり、さらに格差が広がる傾向にあります。患者は安全・安心のもとで、医療を実施している施設で受診する傾向がより強くなり、医療スタッフは患者のニーズに沿った検査を実施する心構えが必要になりました。それは、患者中心の医療を実施するため、意見交換をする場を設けるなど情報の共有化を図り、スタッフが丸となり、検査に取り組む姿勢が不可欠になって来ました。しかし、高度の専門技術を兼ね揃えている診療放射線技師が、専門性をより重視した結果、社会的に閉塞した状況に至っているのではないかと思っております。技師個々の技術向上をアップするための、各種セミナーが数多く開催され、認定資格を取得する方も増えていますが、その認定資格が実際どのくらい医療現場で活かされているか？そして、地位や待遇等にどのように反映されているか疑問符が生じています。これらの現状が、若い会員の技師会離れの一因に連なっているのではないのでしょうか。

最後に、医療スタッフとしての自覚と患者を救おうとする情熱や強い責任感、又それらを継続することができる信頼性が基盤となるのではないのでしょうか。

「放技ニュース100号」に思う

元会長 伊藤 陸郎



遂に100号に届きましたか。一つの経過点ですが努力の到達点でもあります。

私が最初に手がけたのは第7号で、それまで会長が代わるごとに発行しては途絶えまた新規といった形をとっていたのを、会員への情報誌として定期的に継続したいと意気込み、先ず、年間4回の定期発行を目指しました。

いま、既刊号をめくっていると、その時々のごことが目に浮かんできます。事務局が医大に移ったことで医大放射線部から常務理事を委嘱し、業務を分担して頂きましたが、編集は関場君に不慣れですというのを頑張ってもらいました。平成3年の法人認可後は、各支部に編集持ち回りをし発行回数増と紙面の充実を図る中で、奥羽大学の照井さんには長期にわたって編集責任者としてニュース・会報の充実に努めて頂きました。平成6年度には、現在のA4版年6回発行に漕ぎつけています。放技ニュースといっても、2ヶ月に一度では最新情報というわけに行きませんが、本会の進むべき方向を会長・副会長として導いていく事、会員が診療放射線技師という職名に自信を持って県民に信頼される業務を続けられるよう情報を分け合える広報誌として、発行回数増・紙面充実に努めて頂きたいと念じます。

県北支部歴代支部長（県北放射線技師会長）

| | |
|-----------|---------------|
| 昭和23年～33年 | 齋藤 洋一（県立医大） |
| 昭和34年～37年 | 伊藤 忠吉（福島保健所） |
| 昭和38年～41年 | 酒井 榮一（県立本宮病院） |
| 昭和42年～51年 | 上田 稔（県立医大） |
| 昭和52年～59年 | 菅野 勇範（県立医大） |
| 昭和60年～62年 | 卯月 弘（大原綜合病院） |
| 昭和63年～元年 | 伊藤 陸郎（県立医大） |
| 平成元年～4年 | 伊藤 正巳（福島赤十字院） |
| 平成5年～8年 | 本井 正勝（保健衛生協会） |
| 平成9年～10年 | 片倉 俊彦（県立医大） |
| 平成11年～14年 | 本井 正勝（保健衛生協会） |
| 平成15年～現在 | 齋藤 重夫（保健衛生会） |

編集後記

祝・技師会ニュース100号達成!! この広報紙が今日まで継続された陰には、歴代会長を始め、役員並びに編集委員の皆様、並々ならぬ努力とご苦勞があったものだと感じます。これからもその思いを引き継ぎながら毎回、会員の皆様へ、ホットなニュースや情報を提供できるよう努めて参りたいと思います。

(池田)

浜通支部

ニュース100号を迎えて

“1枚の胸のX線写真” 浜通支部長 本田 規

感じたことを書いてくださいとの依頼があり、浜通り支部の歴史でも書こうと考えていましたが、私より詳しい諸先輩がいることに気づき断念することになりました。そこで、難しいことを書いたりしても私には似合わないことがわかっているので、“1枚の胸のX線写真”について書いて見ることにしました。私が磐城共立病院に就職したのは昭和45年4月で、今では大きな病院となっていますが、当時は野戦病院のようであり、ポータブル撮影装置の重さで廊下を何度か抜けるよう建物でした。しかし、その当時としては最先端の自動現像機が設置されていたので、バット現像をしなくてよかったことを覚えています。さて、最初に覚えなければならなかったのは“1枚の胸のX線写真”を撮影するために撮影条件を覚えなければならなかったことです。当時、仕事は教えてもらうのではなく盗み取るものであるといわれ、基本の撮影条件があるだけで、細かい撮影条件は自分なり工夫して、自分にあったものを作っていました。ホトマルなどは付いてなくて、胸厚を測り、患者さんの体型を考え、結核患者で有るか否か、肺気腫が有るかを推測して“1枚の胸のX線写真”を撮影したものです。ですから、予測が外れると“雪原の白鷺”や“闇夜のカラス”となり患者さんに説明して再撮影をすることになります。撮影の準備は暗室でのフィルム装填からすべて手作業でしなければならないため再撮影は仕事量の増加に直結します。ですから、フィルム特性を熟知することや自動現像機の管理が非常に大事であるため、勉強せざるをえませんでした。現在、当院はFCRを使用していますので、撮影部位を選択すると自動で撮影条件が選択でき撮影条件を覚えなくても良く、その点でも一人前になる期間が早くなっています。ただ、体厚や体型による変化に見合った撮影条件を考えなくては本当の意味での良い胸部X線写真にはならないと感じる今日この頃です。

新人技師からの言葉

“2年目を迎えて” 公立相馬総合病院 伊東 麻子

学校を卒業して早1年半が過ぎ、もうすぐ技師歴3年目を迎える私は、就職してから月日の流れる早さに改めて驚いています。1年目に比べて2年目ではどう変わっただろうと振り返ると、就職したての頃は次々に覚える仕事の多さ、人間関係の難しさ等々悩みは尽きず、学生時代に思い描いていた未来と今のギャップに、これからやっていけるかなと何度も不安に苛まれました。今現在では、様々なことをプリセプターから吸収し病院や仕事にも慣れ、以前よりも検査に余裕



を持って取り組めるようになったと思います。私が日々の仕事の中で気にかけていることは、患者様にリラックスして検査を受けていただくことです。患者様には検査への協力をお願いし理解していただいたうえで、安心して検査に臨んでもらうことは、検査の出来をも左右すると実感しました。また人間の千差万別の体を教科書通りの撮影法で撮っても情報が欠けてしまったり、患者様の負担になったりと良い結果は出ません。最大限の情報を引き出すため一人一人の体の特徴や容態を読み、ポジショニングや(一般撮影システムがアナログであるため特に)撮影条件を考慮し補正を加えることは放射線技師の技の見せ所とやりがいを感じています。現在日本では深刻な高齢化社会を迎え、相馬市でも70歳以上の方が約20%を占めており、体動が困難な方が増えているように思います。こちらの心がけと知恵の一つで、患者様が少しでも楽に気持ちよく検査を受けていただくことを念頭に、自分の技術を磨き良い結果に結びつけているような放射線技師を目指していこうと思います。

“技師1年目の挑戦”

呉羽総合病院 平山 麗夢

今年の春から診療放射線技師として働き始め、半年を過ぎました。職場になれること、仕事を覚えることに精一杯だったため、あっという間に過ぎた半年でした。多々、先輩方に迷惑をおかけしながら、少しずつ技術や知識を身につけています。仕事をしていく中で難しいことばかりですが、中でも説明したことが理解してもらえないときに、言葉の大切さ、難しさを感じます。当たり前のように話してみても、なかなか伝わらないときにどのように言い換えて説明するか、はじめはわかりませんでした。先輩方がどのように説明しているかを参考にし、取り入れ、自分で噛み砕いて説明しているうちにわかるようになってきました。言葉の使い方、どう説明すると理解しやすいのかなど、撮影に協力してもらうためにもとても大切なことだと実感しました。また、毎日患者さんと交わす少しの会話がとても楽しく感じます。体調や機嫌の良い悪いがわかったり、今日の天気がわかったりとかくさんの情報を知ることができます。撮影後に笑顔でお礼を言われると技師になって本当によかったと思います。これからも技師に必要な技術、知識、そして患者さんに接する姿勢、心と言葉を大切に日々、精進していきたいと思っています。



編集後記

新旧技師を対比させることで、浜通り技師の未来像を感じようと考えてみました。将来を支える新人技師の皆さん…これからも頑張ってください。(大森)